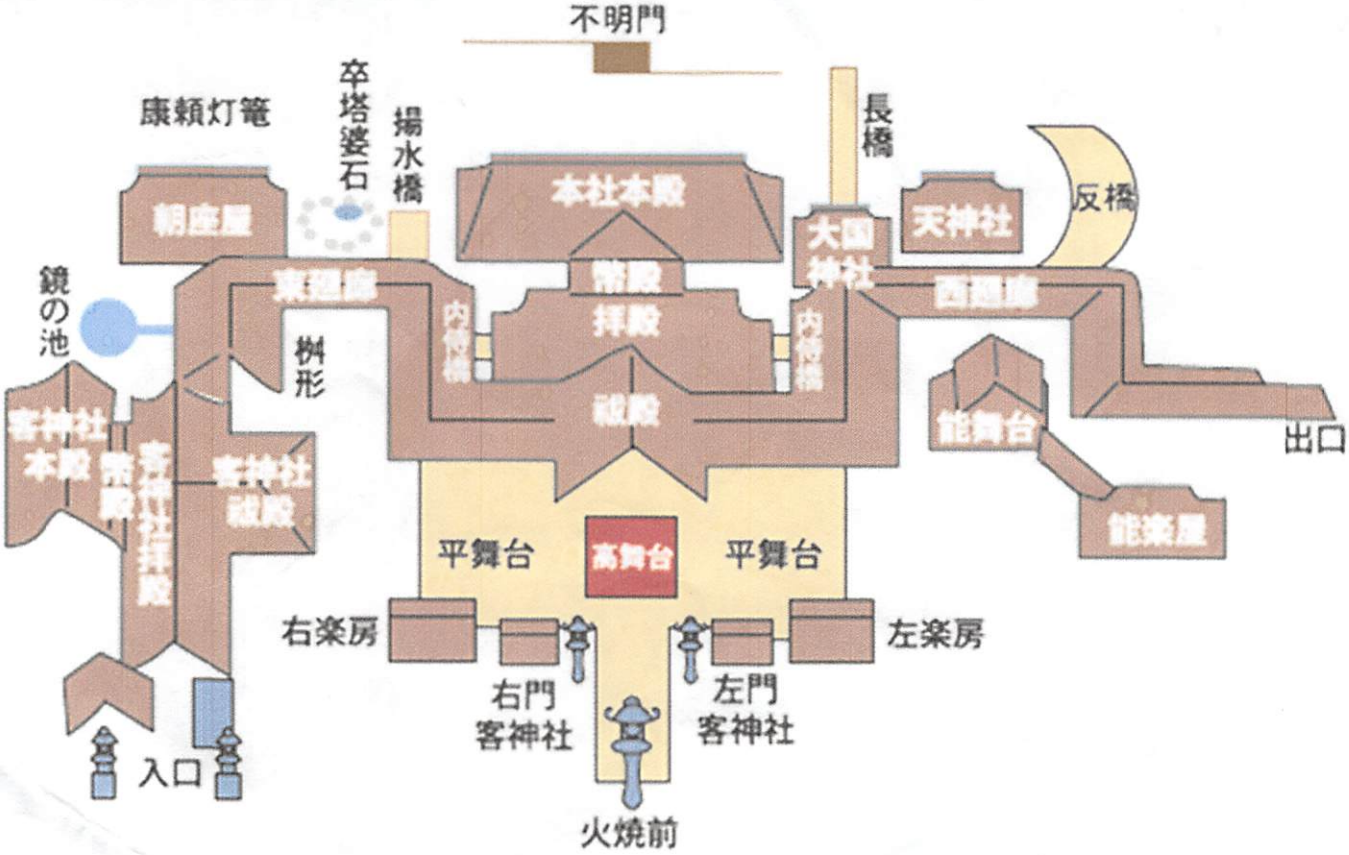
神の島　厳島

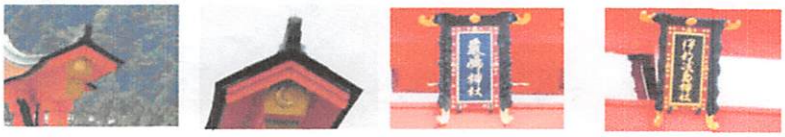

不明門
卒塔婆石
揚水橋
長橋
康頼灯篭
朝座屋
本社本殿
天神社
反橋
大国神社
鏡の池
東廻廊
内侍橋
幣殿
拝殿
内侍橋
西廻廊
桝形
客神社本殿
客神社幣殿
客神社拝殿
客神社祓殿
祓殿
能舞台
出口
能楽屋
平舞台
高舞台
平舞台
右楽房
左楽房
右門客神社
左門客神社
入口
火焼前

大鳥居

有栖川宮熾仁親王（ありすがわのみやたるひとしんのう）の筆による扁額

「厳島神社」（沖側）　「伊都岐島神社」（神社側）

「太陽」（東側）「月」（西側）



木造両部鳥居（四脚鳥居）

大鳥居は厳島神社を代表するものの一つです。本社火焼前（ひたさき）より約160m沖合に建っているといわれ、高さは約16m。奈良の大仏とほぼ同じ高さです。

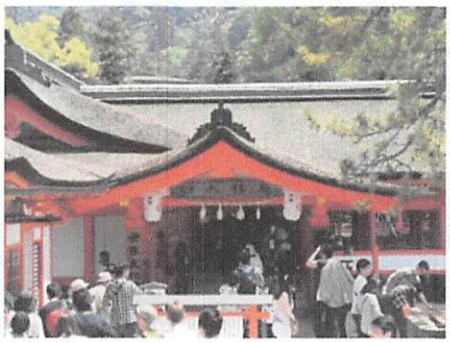
笠木と島木を通例の一本とせず、二部材を外見上一部材に見えるよう箱型にして外形を整え、なかに小石を入れて鳥居自体の重さを増し、鳥居全体の重み（60ｔ）だけで立っています。現在のものは明治８年（1875）の再建で、平安末期以来８代目の鳥居です。

鳥居の屋根の両側には。笠木に「月」と「太陽」がはめ込まれ、中央には有栖川宮熾仁親王の筆による扁額が掲げられています。

東廻廊

切妻造り

屋根は檜皮葺（ひわだぶき）で、棟には**棟瓦**が載せてある



西廻廊

唐破風（からはふづく）造り

昔はこちらが入口だった

回廊の床板は、１間に８枚敷いてあり、釘は使っていません。板と板の間にはわずかな透き間（すきま）があいていますが、高潮時の浮力をやわらげたり、降り込んだ雨水を抜くためといわれています。また、床は二枚重になっていて、本来の床板は下にあるほうで、上に敷いてあるのは養生板（ようじょういた）といい、参拝者が土足で歩いても良いようになっています。これは近年になって施工されたもので、昔は履物を脱いで昇殿していました。

回廊の細部工法で珍しいものがあります。屋根裏を見ますと、一般とは逆にたる木の上に棟木が乗っているのが分かります。このことによって棟木の見える部分が少なくなり、天井が美しく軽快に見えるという工法です。

客神社（まろうどじんじゃ）〔摂社（せっしゃ）〕

御本社と同様に、本殿（ほんでん）・幣殿（へいでん）・拝殿（はいでん）・祓殿（はらいでん）からなり、嚴島神社の祭典は、この客神社から始まります。

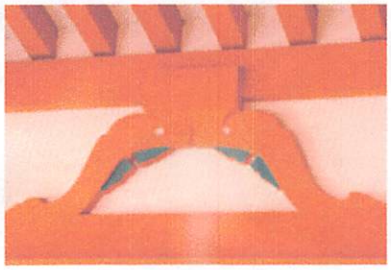
摂社の中でも一番大きく、嚴島神社の祭事のおりには、一番先に神職がお参りいたします。

天忍穂耳命（あめのおしほみみのみこと）・活津彦根命（いくつひこねのみこと）・天穂日命（あめのほびのみこと）・天津彦根命（あまつひこねのみこと）・熊野櫲樟日命（くまのくすびのみこと）の５男神が祀られています。

祓殿で珍しいのが平安時代の様式を伝える二木造のかえる股です。平安以降のかえる股にはほとんど行なわれなかった二木造で、左右の木材を中央で山形に組み合わせてあります。

祓殿正面の海側の波除板（なみよけいた）が切れているのは、ここに船が着けられていた名残といわれています。

平安時代の様式の二木造の蟇股（かえるまた）



摂社とは：その神社の祭神と縁故の深い神を祀った神社のことです

鏡の池

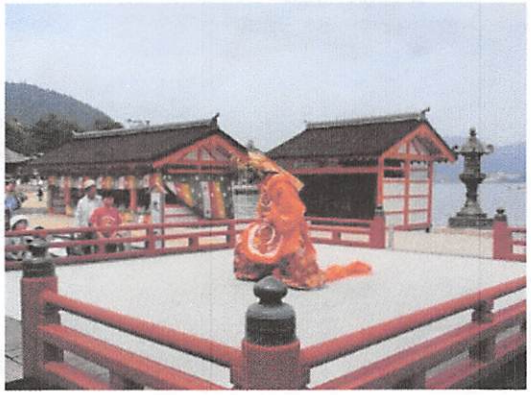
本社・客神社や廻廊をはじめとする浜辺の社殿のすぐ近くの砂浜に、水が湧き出ている丸い池が３か所あります。この池は干潮時に火災が発生した時の消火用水の役割をはたしたといわれていますが、一つの景物にもなりました。

特に客神社脇の池は、「**鏡の池**」と呼ばれ、「厳島八景」の「鏡池秋月」と称され、この池に映る月はもっとも美しいものとされ和歌や俳句に読まれています。

朝座屋

1168年の造営記録に「朝座屋」の名があり、本社・客神社等とともに当初から建てられており、江戸時代には社家［しゃけ］・供僧［ぐそう］・内侍［ないし］が会合する建物をして使われていました。

高舞台



四天王寺の石舞台・住吉大社の石舞台
と共に日本三舞台といわれています。

舞楽が舞われる舞台です。
舞楽とは、楽による舞踊のことで、
陵王・振鉾・万歳楽・延喜楽・太平楽・抜頭
など十数曲が、今なお厳島神社で舞われます。

楽房

インド・唐から伝わったものを**左の舞**といい、左舞(さまい)を舞うときは左楽房で奏します。 **満州・朝鮮半島**から伝わったものを**右の舞**といい、右舞(うまい)を舞うときには右楽房で奏します。現在も舞楽を奉奏する時、両楽房で奉奏されています。

平舞台

高舞台に対し平らなところを平舞台といいます。

寝殿造りの庭にあたる部分で、広さは 167.6 坪（約 553 平方メートル)。
安元 2 年(1176 年)、平氏一門が社参して千僧供養が行われた際、社殿の前方に仮廊を設けたという記録があり、こうした仮廊が常設となったものともいわれます。
また他の社殿の束柱は木造ですが、この平舞台を支えるのは、赤間石の柱です。

火焼前

平舞台の前方には火焼前（ひたさき）と呼ばれる突き出た箇所があり、管絃祭の出御・還御はここから行われます。

本社

本社・高舞台・祓殿

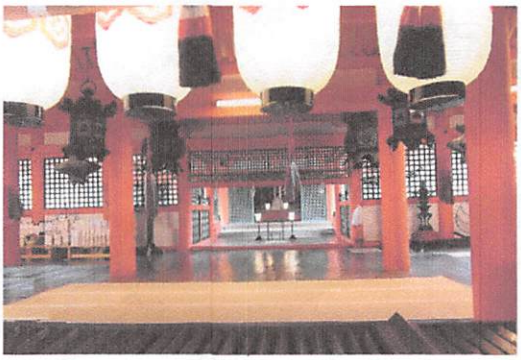
宗像三女神（市杵島姫命・田心姫命・湍津姫命）

切妻両流造りで、正面には緑青塗りの引き違いの菱形の格子戸がはめられた本殿があります。
屋根に神社の定番とも言える**千木と鰹木**を持たず、桧皮葺の屋根に瓦を積んだ化粧棟のスタイルを取り入れた**寝殿造り**ならではの様式が特徴です。
日本一大きい**本殿**といわれています。

門客神社

御祭神をお守りするため、大鳥居ではなく本殿を向いています。

本殿・祓殿

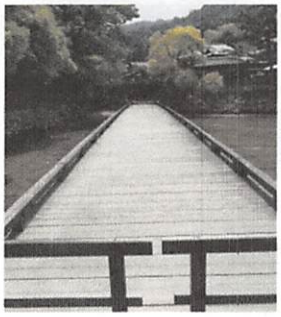


幣殿：幣帛（神前に供える物の総称）を供える施設
拝殿：参拝者がご祭神と向き合い、お祓い・参拝する施設
祓殿：お祓いをするところで、管絃祭の時に**鳳輦**1(御輿)が置かれる場所であり、また雨天時の舞楽奉奏などに使われます。

注１．屋形の上に金銅の鳳凰を飾り付けた神輿のこと

拝殿の下側から見上げると、棟が２つあり、その上を一つの棟で覆う形となっています。これを**三棟造り**といい、奈良時代の建築様式といわれています。

長橋



ご本社裏の御供所［ごくしょ］から神饌が運ばれるときに使われていました。

橋の左手に【不明門】があります。

あけずのもん
不明門

神様だけが通られる門で決して開けられることはない。
社殿の中で唯一の**瓦葺の建造物**です。

本殿裏手の陸地部は後園（うしろその）と呼ぶ禁足地となっています。禁足地には玉垣をめぐらし、中央に不明門と呼ぶ本瓦葺の四脚門が建ちます。不明門は祭神が弥山から社殿へ降りる際に通る門とされ、人が通行することはありません。

そりばし
反橋

反橋の【とりつき部分】も唐破風造りとなっています

別称：勅使橋［ちょくしばし］・たいこばし
長さ約 24m、幅 4m、高欄は丹塗り・橋脚は墨塗り
別名、勅使橋ともいい天皇からの使者（勅使）だけがこの橋を渡ることができました。
中央に階段を設けて渡ったものと思われます。

能舞台

国の文化財として指定されている**六能舞台**の一つ。

切り妻造りであり、笛柱が独立しています。
海中にあるため、通常床下に共鳴のために置かれている**甕（かめ）が無い**。代わりに、床下の**根太が三角形**で、その上に床板を張り、大きく響くように工夫されています。
床が太鼓の皮のような役目を果たすように造られており、足拍子のたびに大きく共鳴する仕組みとなっています。潮の満ち引きによって床の響きも変わる工法です。

秋の献茶祭を表千家、裏千家が隔年交互に行います。

五重塔

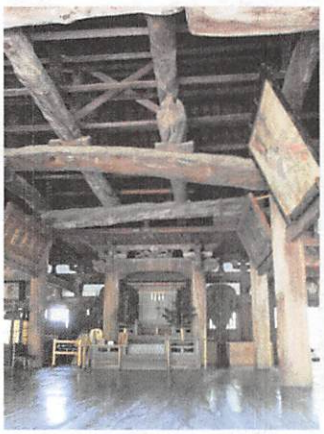
高さ ： 27.6m　　方 ： 3.6m
応永 14 年（1407）建立
桧皮葺で和様・唐様を融合した見事な建造です。
内部は彩色がしてあり豪華絢爛。内陣の天井には龍が、外陣の天井には葡萄唐草の模様が描かれています。

その他壁板には、迦陵頻伽(1)［かりょうびんが］や鳳凰が極彩色で描かれています。特徴の一つに 2 層目で止まっている心柱があり、風に対して強い構造となっています。

本尊の釈迦如来・普賢菩薩・文殊菩薩は、明治の神仏分離で大願寺へ移されました。

（注１）迦陵頻伽：極楽にいて、美しい声で鳴くという想像上の鳥

豊国神社（ほうこくじんじゃ）［通称：千畳閣（せんじょうかく）］



桁行 41m　梁間 22m　単層本瓦葺入母屋　木造の大経堂
1587 年(天正 15 年)、豊臣秀吉が千部経の転読供養をするために着工したものの、10 余年後に建立を命じた秀吉の死によって未完成のまま今に至っています。梁には、かつて厳島神社に奉納されていた絵馬が掛けられています。

入母屋造りの大伽藍で 857 畳の畳を敷くことができ、軒瓦には金箔が押してあることから完成していれば、さぞや豪華な桃山文化を取り入れた大経堂になっていたと思われます。
また堂内には、大鳥居が明治 8 年に建替えられた時に使った尺定規があります。
本尊の釈迦如来（しゃかにょらい）・阿難尊者（あなんそんじゃ）・迦葉尊者（かしょうそんじゃ）は、明治維新の神仏分離令のときに大願寺に移されています。

- 摂社

天神社　　菅原道真

大国神社　　大国主命　大国主命は、国造りの神・農業神・商業神・医療神・縁結びの神です。**田心姫命と結婚していますので**、御本社に近い場所にお祀りしていることでも伺えます。　大黒神社

一段高い拝殿の右側が、昔、神饌の仮案所で、ご本社裏の御供所［ごくしょ］から運ばれてきた神饌をここに置き、ここから先は、内侍が運びご本殿にお供えされました。

- 橋

揚水橋（素木造り）特徴は「桟の間」という中央に出っ張りがあります。ここから潮を汲み上げる儀式があったといわれています。手水鉢

左・右内侍橋　　屋根をかけた形式の建物

- 枡形［ますがた］

客神社祓殿［はらいでん］と廻廊で囲まれたところを、枡形といいます。毎年旧暦 6 月 17 日に行われる「管絃祭」で御座船や阿賀・江波の曳船がここで船を 3 回廻します。廻廊に大勢のお客様が陣取り、管絃祭のクライマックスを迎えるところです。

弥山の七不思議

消えずの火（きえずのひ）

大同元年(806 年)、弘法大師が弥山山頂で百日間に及ぶ求聞持（ぐもんじ）の秘法を修して以来、今日まで途絶えることなく燃え続ける霊火。この火で沸かした霊水は万病に効くと言われています。また、明治 34 年(1901 年)に操業を始めた八幡製鉄所の溶鉱炉の種火や広島市の平和記念公園の「平和の灯」の元火にもなりました。

錫杖の梅（しゃくじょうのうめ）

弥山本堂のすぐ西の脇にある八重咲きの紅梅。弘法大師が立てかけた錫杖が根をはり、ついには梅の木になったという伝説が残っています。毎年美しい花を咲かせますが、山内に不吉な兆しがあると咲かないとも言われています。

曼荼羅岩（まんだらいわ）

弥山本堂の南側の下方にある畳数十畳分もの巨大な岩盤。「三世諸仏天照大神宮正八幡三所三千七百余神…」という文字や梵字が刻まれており、古来より弘法大師の筆と伝えられます。現在は立入禁止となっていますが、『厳島図会』には、この岩の上で拓本をとっている人たちの姿も描かれています。

干満岩（かんまんいわ）

弥山山頂から大日堂に向かって下りる西側の道を少し下ったところにある巨岩で、その名の通り、側面にあいた直径 10cm 程の穴に溜まった水が潮の満ち引きに合わせ上下するといわれます。さらにはその水には塩分が含まれているとか。岩穴は標高約 500m の地点にあり、いまだに科学的な証明がなされていない不思議な現象です。

龍燈の杉（りゅうとうのすぎ）

旧正月初旬の夜になると宮島周辺の海面に現れる謎の灯りを龍燈と言い、この龍燈が最もよく見える弥山頂上の大杉は「龍燈の杉」と呼ばれていました。現在この杉は枯れてしまったものの、それらしき根株が残されています。

拍子木の音（ひょうしぎのおと）

カチーン、カチーン。人気のない深夜、どこからともなく拍子木の音が聞こえてくると言われています。弥山に棲む天狗の仕業と語り継がれ、音が鳴っている間は家にこもっていないとたたりがあると恐れられていたそうです。

時雨桜（しぐれざくら）

どんな晴天の日でも時雨のように露が落ち、地面は通り雨が過ぎ去ったように濡れる不思議な桜。江戸時代に発行された『厳島図会』にもその奇妙な現象が記されているとか。残念なことに現在は伐採され、切り株だけが残っています。